

姉とゲームと思い出と

生牡蠣

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いつも一緒にゲームをしていた。ずっとこれが続くと思っていた。



## 姉とゲームと思い出と

「僕」には姉がいる。姉と僕は小さいころからおもちゃの取り合いや見たいテレビ番組のチャンネル争いといったようなけんかをすることが多く、お互いに悪口も言い合つたし、酷い時には取つ組み合いに発展した覚えもある。

しかし、まったく仲が良くなかったわけではない。姉と僕が不思議と仲良くできた遊びが、ゲームであつた。ある日、父が気まぐれで買つてくれた灰色の小さい箱、スーパーファミコンと星のカービィ3の力セット。テレビ画面に映る見たこともない未知の世界、そんな世界を彩るBGM、その世界を全力で生きている魅力的なキャラクター、それらすべてに僕たちが夢中になるのには時間はかからなかつた。最初はどちらがカービィ(1P)を操作するか少し揉めたが、ゲームをしているときは自然とお互いに協力し、仲よく遊べた。そしてなにより楽しく遊べた。(1P争いは死闘（ジャンケン）の末、姉が1Pをプレイ。この時から僕は姉とのゲームでは2Pでプレイするのがデフォルトになつた)

それからは色々なゲームを通じて2人で色々な冒険をした。広大な大地、無限に続く大空、大海原、砂漠、氷の世界、過去や未来の世界だつて2人でなら制覇できだし、どんなに大きな敵や強い武器や魔法を使う敵、世界を脅かす巨悪だつて2人で倒し、正義の味方や英雄にだつてなれた。どんなに困難でもお互いに補い合い、知恵を出し合ひ、切磋琢磨し乗り越えられたこの姉となら、どこまでも冒険できると子供ながらになんとなく信じていた。

時が経ち、姉は遠くの大学に進学するために家を出て行き、そのままその地域で就職し始めた。心配性の母は就職の知らせを聞いた後もいつでも帰つて来れるようにと姉の部屋をそのままにしており楽観主義の父からは「子離れしてあげなよ」と苦笑いされていたのは記憶に新しい。

「私」は高校生になり、勉学に四苦八苦し、部活動をほどほどに楽しみ、

多くはない友人たちと駄弁るという平凡な日々を続けていた。高校生になつてからは思春期からか一人称が「僕」だと恥ずかしい気がして大人っぽさを演出しようと一人称を「私」に変えたりした。ゲームが好きなのは変わらないが勉強や部活が忙しいのと、高校生が自由に使える金などたかが知れている問題により、最新ゲームの情報は仕入れているが買うことはせずたまに中古屋で安い一昔前のゲームを買あさっている。そのためうちのスーパーファミコンはまだまだ現役でいてもらわないと困るため国宝のように大事に使っている（国宝がどのくらい大切に扱われているかは知らんけど）。それに、これは姉と「僕」が冒険をした証だ。「完全な形で残しておきたい」「何かが欠けてしまえば、思い出の壊れてしまう」今思うとそんな思いが心のどこかにあつたのかもしれない。

そんなある日、ネットサーフィンをしていたら

「星のかービィシリーズ最新作！ 星のかービィ  
スターアライズ ニンテンドー Switchにて発売決定！」

「あー、どーせ switch持つて  
ねーし買わないだろーな」と思いつつその記事を流し見していると、  
ある1点の画像に手が止まりパソコンの画面を凝視してしまった。  
そこには子供のころにカービィ（姉）と一緒に冒険したあのキャラク  
ター（僕）の姿があつたのだ。

記事を読み進めると、カービイシリーズで出てきた過去作のキャラクターを使つて遊べるということが分かつた（この時、私が操作していたキャラの名前がグレイであることを初めて知つた）。過去に思入れのあるキャラクターでまた遊べる、そう考えただけでわくわくが止まらなかつた。早速準備しなくては！　Switchは高いが短期バイトで貯めた金で何とかなるか！　周辺機器は買おうかな？ああ、興奮してきた！　また、あの時のキャラを使って、あの頃と一緒に――一緒に？　誰と？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・急に興奮が収まつていくのを感じた。

「…………まあ、受験もあるし、やつてる暇、ないよね」

わざとらしくそうつぶやくそのままニュース記事を閉じ、柄でもないのに勉強を始める。まるで何かから逃げるようだ。

そんなことも忘れかけていたころ、久々に姉から「次の連休、遊びに来ない？ 移動費出すからさ」という内容のメールが来た。久々のメールに驚きつつもちようど予定もなかつたし、移動費も出してもらえるのはありがたいと思い、行く旨の返信を行つた後、ふと「遊ぶつて、何して遊ぶんだろ？」と疑問に思つた。姉と遊ぶ……姉とともに遊んだ記憶がゲームしか出てこなかつた……この年になつてゲームしか出てこないとは我ながら幼稚だと思うが実際それが真つ先に出てきたということはきっと私が1番やりたいことなんだろうなと思うことにした。ゲームといえば、この前 switch を買うちかどうか迷つたなと思い出しただが、最近友達との付き合いが多く出費が多かつたため金欠であり今から switch を手に入れることは不可能に近かつた。さて、どうしたものか……そうだ、スーパーファミコン持つていこう。とち狂つた考え方だと自分でも思うが、それしか思いつかなかつたし、何より久しぶりに、姉と一緒にゲームができると考へるとあのわくわくがよみがえつてくる。

よし、早速準備しよう！ キャリーケースにスーパーファミコン一式を詰めて、カセットはマリオカートと、それからゴエモン……は吉田君に借りパクされたんだつた……バレバレなのに最後は逆切れされてそのまま押し切られたんだよなあ……おつと、感傷に浸つている場合じやない。あとは聖剣伝説2とそれからもちろん――あれ？ 星のカービイ3のカセットがない……？

何度も手持ちのカセットを確認したが、星のカービイ3のカセットだけがなぜかない。置き忘れた？ いや、最近どころか姉が遠くに行つてから1人で遊ぶ気になれず、ケースからカセットを出した記憶がない。借りパクされたのを忘れていた？ いや、あのカセットは姉と取り合いになつたとき自分のものと主張するため自分の名前をマジックで大きく書いてしまつて恥ずかしくて友達に見せたこともな

かつた。まあおかげで借りパク防止になつたが……というかカセットの取り合ひってなんだよ……結局2人で遊ぶんだからあんまり関係ないだろ……じゃあ姉が持つて行つた……カセットだけでどうしろと。

うーむ、考へても心当たりがまつたくない。考へているうちになんだか萎えてしまつた。まあ流石にいい年だしゲームはないかと自分を納得させゲーム機の持ち込みをあきらめた。

あれから姉のところに行く当日までカセット探しを続けたが、全然見つからなかつた。やつぱり、それからも何度かスープーフアミコンやつぱり持つて行こうかなと何度も考へては、カセットを探すことを行つくり返してしまつていた。今思えば、あきらめたと口では言つていたがキヤリーケースの中に入れっぱなしにして、元の位置に片づけようとせず、結局部屋に置いたままにしてきたので未練たれたれだよなあと感じる。まあ、カセットは家の外に持ち出した記憶はないし、そのうち見つかるだらう、などと考へていたら「まもなく○○～○○駅前」と電車のアナウンスが鳴り響いた。姉の住むアパートまでは電車を乗り継いで約2時間弱、長時間移動でくたびれた身体を伸ばしながら電車から降り駅の出口まで歩き始めた。

駅から出てすぐに、「おーい！」という懐かしさが感じられる声が耳に届く。声のするほうに顔を向けると、小さめの紙袋を持つた姉がぶんぶんと大きく手を振つていた。最後にあつた時よりどこか大人びてゐる、だがどこか子供のころの面影がうかがえあの頃を思わせる雰囲気が漂つてゐる。私は姉が少し変わつてしまつたことへの不安と懐かしさからくる安心感で複雑な気持ちになりながら「久しぶり」と短く返した。挨拶もそここに2人で姉の住むアパートまで歩く。駅から距離があるほうが安いとのことで徒歩15分ほどかかるらしい。移動中、姉は「遠いのによく1人でこれたね」「最近学校はどう?」「ここ」の近くにモスバーガーあるんだよ。地元にはなかつたよね」などいろいろな話題をふつてくる。気を遣つてくれているのか話題は私が興味を示しそうな話が中心だつた。だが、そんなことに気を遣わ

なくとも、久しぶりに姉と話すことができた。――それだけで「僕」はうれしかつたんだ。

話に夢中になっていたからか、徒歩15分の距離はあつという間だつた。姉のアパートは駅からは遠いが新しそうな外観で、これなら駅から多少遠くても入居したいと思う人もいるだろうなと感じた。姉の部屋に入りリビングルームに誘導されながら、そういうえば遊ぶつて何するんだろう?と思いつきそれを聞こうとしたところ、リビングルームのテレビに目が釘付けになつた。いや、正確にはテレビの前においてある1つの機械、この間まで私が買うか買わないか悩んでいた例のもの、ニンテンドーswitchがそこにはあつた。「あつこれつて・・・」と私が言い終わる前に姉は持つていた紙袋からあるものを取り出した。長方形型の箱で派手な色合い、特に目を引くのはあの頃より鮮明に描かれているキャラクター、そしてその箱には「星のかービィ スターアライズ」と書いてあつた。

「久しぶりにさ、一緒にゲームやろう」

少し照れながら姉が言つた。――ああ、姉も同じ気持ちだつたんだ。と胸の奥が熱くなるのを感じた。

それからは姉とともにゲームを楽しんだ。もちろん、あの頃と同じで姉がカービィを、私がグーリーを操作した。見慣れたザコ敵の見たことのない動き、聞いたことのないはずなのに懐かしさを覚えるBGM、新しさと懐かしさが共存する奇跡のようなバランスの、まさに神ゲーといえるものであつた。ゲームをしていると、小さい頃の思い出がふつふつと思い出され、自然とお互いにその手の話をし始めたのは必然であつた。

「小さいころ、何にも考えずに走りすぎて穴に落ちたよねー」

「・・・姉さんはあの頃から荒っぽかつたよね」

「荒っぽいってなによー、あんたなんか弱つちい敵にだつてビビッ

て動けなかつたくせに」

「あ、あれは慎重だつただけだし、あーほら敵来てるつて!」

「ふつふつふ・・・そんなもので『まかされな・・・あーつ! めつちや  
敵来てるー!』

「だから言つたんだよー!」

「( )のBGM良くない? 着信音これにしようかな・・・」

「・・・職場でスマホ鳴つたら気まずくない?」

「いやいや、今の時代ゲームの曲着信音にするぐらい普通だつて、  
つーがばれないって」

「おっ、ナイスサポート! さすが私の弟!」

「・・・子供のころ、こんな弟恥ずかしいとか言つてたくせに・・・」

「・・・あれ? そだつけ・・・?・・・まあ若氣の至りつしょ!」

「おい」

「・・・ねえ・・・母さんたちはどんな感じ・・?」

「母さんはうつとうしいくらい心配してるよ、いつでも帰ってきてもいいように部屋も残してるくらいだし」

「父さんは・・・なに考えてるかよくわからないけど、たぶん心配してるんじゃない?まあ二人とも元気にしてるよ」

「・・・・・そつか・・・・」

「あーやつとクリアできたねーってか日い跨いでるじゃん!?」

ラスボスを倒し、エンディングの余韻に浸り終わつた後、外を見たら真っ暗であつた。

姉の部屋についたのが夕方ごろで現在は深夜の1時、途中食事などで休憩をはさんでいたが、お互に5、6時間もゲームをしていたので驚いた。しかし、時間を忘れてしまうほど楽しい時間を過ごせたと私は満足していた。ああ、やはり姉とのゲームは楽しい。これからは私は受験、姉は仕事でお互いに忙しくなるだろう。でも、頑張れば時間を作れないわけではないし、今回みたいな連休は1年のうちにはんどもある。なんならバイトで金をためて家から定期的に通えばいい、ちよつと大変だけどそんなことは苦ではない。だつて、また、あの頃のように2人で――

「いやー独身時代の最後にあんたとゲームができてよかつたよ」

そんな「コンビニ行つてくる」みたいなテンションで姉がとんでもないことを言つた

私は頭の中が真っ白になつた「えつ、独身最後・・・?」と戸惑いながらやつとの思いで言葉を発した。姉は恥ずかしそうに笑みを浮かべながら

「うん、わたし、結婚するんだ」と嬉しそうに言つた

一夜明け、気づけば帰りの電車に乗っていた。あれからのことはあまり覚えておらず、たしか気分がすぐれないとか嘘をついて帰ることを姉に伝えたんだつたか、姉が心配して駅まで送ると言つてくれたが、「大丈夫、一人で帰れる」と念入りに伝え「うん・・・じゃあ気をつけて帰るんだよ」と引き下がつてくれた。帰り際に「ありがとう、たのしかつたよ」と言つてくれたのをなんとなく覚えている。

姉が結婚する。正直、うれしいと思う気持ちはあるし、祝いたいという気持ちもたしかにある。しかし、なんだか喉の奥に小骨が刺さっているような、指に大きめのささくれがあるような、そんなもやもやした気持ちが胸の中にあつた。だが、そのもやもやの正体は何度考へてもわからなかつた。

あれから連休も終わり、普通の生活に戻つた。だが私はまだもやもやした気持ちのままで、ボーツとしていることが多くなつたらしく、母から「話くらいちやんと聞きなさい」と小言を言われるようになつた。こんな気持ちが続いていると、本当に病氣になりかねない。明日は土曜日だし、ここはすつきり忘れるためにパーツと派手に友達と遊びに行こうかと考えながら学校から帰る。すると、自宅の前に見知らぬ車が止まつてているのが見えた。NOKの集金かなとぼんやりと考へていると、母さんが家の外に出てきた。母さんは私を見つけるなり「あつ、帰ってきた」と言いながら駆け寄つてきた。一体どうしたのか聞こうとする前に母が次の言葉を聞いてそんな些細な疑問も吹き飛んだ。

姉が婚約者を連れてきたらしい、と

私は今、来客用の座敷に座つており、隣には父と母が並んで座つてゐる。向かいには姉と、婚約者の男が座つてゐる。どうやら、今日は姉が婚約者とあいさつに来る日であつたらしい。なんでおしえてくれなかつたんだ！ と母を小突いたら、最近あんたがボーツとしてるのが悪い！ とどつかれた。けつこう痛い。

・・・それはさておきと姉が連れてきた男のほうを見る。いい奴そ

うだな、それがその男を見た第一印象だつた。男と姉は高校のころの付き合いで、卒業間際に交際に発展し、現在に至るらしい。男は緊張しているのか若干汗をかいており、言葉を発するときも声が上ずつているのがわかる。しかし、父や母の質問には目線をこちらにまつすぐ向け、若干どもりながらも自信があると感じさせるような内容でどこか頼もしさも感じられる。私はこの男が兄になつたら多分楽しいんだろうなど感じたが、まだもやもやした感情が残つている……いや、さつきより大きくなつていてる？ この男なら、多分姉を幸せにできる。そのような確信に近いものも私は抱き始めていた。ではなぜこんなにもやもやしているんだ？ そんな複雑な感情を抱いていると母が「なぜお互いに結婚しようと思った」のかと、二人に問い合わせた。すると、お互いいのいいところを語り始めた。

姉曰く

「前へ前へと行き過ぎて いる私のストップバーになつてくれる人」「私では氣づかないこと、できないことを補つてくれる人」「この人となら、どこまでも行けると思つた」

男曰く

「優柔不断気味の自分を引っ張つていつてくれる人」「自分の足りないところを補つてくれる人」「この人と、どこまでもいきたい」

そのような惚氣話がいくつも続き、まだ続きそうだなあ。一回席

を離れて飲み物でも取つてきてもいいかな？ と思い始めた時

「あと・・・」

「それと・・・」

「彼（彼女）といると、楽しいから」「

と2人声が重なった。

・・・・・ああ・・・・・そうか・・・・

もう姉にとつてのグーイは、もう僕じやないんだ。

胸のもやもやが晴れ、何かが “ストンツ” と落ちたのを、確かに感じた

それから私は、トイレに行くと言つてその場を離れて自室に向かつた。日も傾き始めたのか、夕暮れの光が窓から差し込んでいて少しあぶしい。まぶしさに少し目を細めながら私は部屋の隅に立てかけてあるキャリーケースを開けた。そこには、入れっぱなしにしていた、見慣れた思い出の品が完全な形であつた。私はただそれを見つめ、当時の思い出に浸つた。

この小さな箱は、私たちに色んなものを与えてくれた。様々な世界の美しさに触れた感動、どんな困難にも諦めずに立ち向かう精神、協力してクリアすることで得られる何倍にも膨れ上がつた喜び、・・・すべての思い出が昨日のようによみがえつてくる。しばらく思い出に浸つた後、自然とそれに手が伸びた。今からやろ

うとしていることを、私の心の中で「やめろ、壊れてしまう」「これは大切なもののだろう」と止めるような声が響く。しかし、「大丈夫、思い出は壊れないよ」とつぶやき、箱から伸びている1本コードを抜き、ポケットのしました。

ずいぶん長く思いにふけっていたのだろう、気がついたら日はすっかり落ちて窓の外は薄暗くなっていた。早足で座敷に戻ると、話はほとんど終わっていたようだ。父は「娘をよろしくお願ひします」と言つて男と握手をしていたのが昔のドラマのベタなワンシーンのように見えて少し笑つてしまつた。母に「長かつたけど、具合悪いの?」と小声で心配されたが、「難産だつた」と適当に流した。

話が終わり、姉たちはもうそろそろ帰る旨を伝えた。もう暗くなつてるし、泊つていけばいいと母が言つていたが、明日も午前中だけ仕事があると言われては母も引き下がるしかなかつた。玄関先に出た後も母は「ちゃんとご飯食べるんだよ」「風邪をひいたら、我慢せずにちゃんと病院行くんだよ」と心配そうに話していた。父は母の隣に立ち笑顔を浮かべていた。しかしその表情の中に寂しさが見えたのは多分気のせいではないだろう。私はそんな2人から離れたところに立ち、社会人は土曜日にも仕事があるんだと恐怖を感じていると、男が近づいてくるのが見えた。男は優しそうな、それでいて少し残念そうな笑み浮かべて、「本当は君ともっと話してみたかったけど、また次の機会だね」と私に言つた。本当は話しかけられたら「あんなじやじや馬、もらつてくれて感謝してます」や「尻に敷かれる人生が目に浮かびます」など茶化してやろうと思つていたが、いざ、その時になると言葉が出てこなかつた。ただ、これだけはやらなくてはならないという謎の使命感に押され、ポケットに入れていたものコードがついていて

カラフルな○型のボタンがや+型のボタンがついていて  
一見すると変な形であるが不思議と手になじむ

当時の僕の相棒――――――スーパーファミコンのコントローラーを差し出した

「えつここれは……」と男は戸惑った様子であった。確かに、結婚のあいさつにきて、自分の義弟になるかもしれない者からいきなり謎の物体を渡されたら誰だつて戸惑うだろう。私だつて戸惑う。

しかし、私はそうしなければならないと思つたんだ。だつて

「姉さんと冒険するには、必要だから」  
人生を歩む

そうだ、これさえあればきっと

どんなに広大な大地だつて、無限に続く大空だつて怖くない！

どんなに大きな敵や強い武器や魔法を使う敵、世界を脅かす巨悪にだつて立ち向かえる！

正義の味方や英雄、自分のなりたいものにきっとなる！

これで、どんな困難にでも打ち勝つて姉と一緒に歩いてほしい

僕には、もう、できないことを

男はまだ戸惑つた様子であつたが、少しだけ笑みを浮かべて「ありがとう、絶対大切にするよ」と言つてくれた。――頼んだよ、義兄さん

義兄さんにコントローラーを渡した後、姉が近づいてきた。

「今日来るの知らなかつたんだつて？　ごめんね、いきなり来て」「いや、姉さんの家もあるんだから、いきなり来てもいいでしょ」

「あー、それもそうか……」

というような会話をしていると姉が少し不安そうな顔になり

「1人でも大丈夫？」

と聞いてきた。

本当はもつと一緒に冒険したい、  
何気ないような話をしていたい、

たまにけんかもして、しばらくして仲直りして、  
また一緒に遊んで、  
ずっと一緒にいて欲しい

そんな思いが心の中を支配するが、無視する

「大丈夫」

だから、安心して、冒険（人生を楽しんで）してきて

「・・・・・そつか」

姉は『ポンツ』と私の頭に手を乗せ

「さすが私の弟だ」

と静かに微笑みながら言つた

ちゅんちゅん、ちゅんちゅんと小鳥たちのさえずりで私は目を覚ました。

昨日、姉たちが帰ったあと緊張から来る疲れからか、夕食をコンビニ弁当（私が買いに行かされた）で簡単に済ませ、家族それぞれ早めに休むことにした。休む前に、母は「お姉ちゃんの部屋、片づけなきやね」と寂しそうでありながら、もうあの部屋は必要ないと思わせるような自信を感じさせる表情で静かに言い、父は「子離れしたつもりだつたんだけどなあ・・」とどこか情けない声をあげながら滅多に飲まない酒をグビグビと飲んでいたのが印象に強く残っている。私は自室にきてすぐに眠つてしまつたらしく、昨日の服装のままであつた。昨日は風呂にも入らず寝てしまつたため、せめてシャワーだけでも浴びようと体を起こすと、壁に立てかけているキャリーケースが目に入る。その中にまだ入つている灰色の小さい箱、3色のカラフルなコードも、少し大きめのコンセントも入つていて。しかし、コントローラーが1個足りない。不完全な形となつてしまつたを見ると少

し寂しい気持ちになるが、後悔はまつたくなかつた。

「さて、せつかくの土曜日だし、遊びにでも行こうかなー！」とわざとらしく言いながら部屋を出るとすぐに向かい側の扉が視界に入つた。姉の部屋だ。いつもならスルーして通り過ぎるが、もうすぐここも片づけられると考えると気になつてしまつて、「悪いことしてるなあ」と罪悪感を覚えながらも、扉を開けてしまつた。部屋の中は勉強机やベッド、ぬいぐるみなど姉が家を出て行つた時のままになつていて、ここで待つていたら姉がひよつこり帰つてきそうだなど感じてしまう。部屋に入つていくと、何かが足にぶつかつた。足元を見ると、小さくてカラフルな箱が1つ置いてあり、箱には小学校低学年が書きそなな不細工な字で「たからもの」と書いてある。そういえば、姉は子供の頃から自分の大切なものは箱にしまつておく人だつたなあ、私のお気に入りのおもちゃもここにしまわれてたことがあつたつけるなあ、と懐かしみながら箱を見ていたら、開けかけの箱の隙間から見慣れたものが見えた気がして思わず箱を開けてしまつた。

箱の中には、友達と撮つたであろう写真や、家族旅行で海に行つたときに拾つたきれいな石などが入つていた。そして、その箱の一番上に、私がずっと探していた「星のかーべい3」のカセットが入ついて、カセットの表面に姉と――「僕」の名前が書いてあつた

「なんだよ・・・」

手が震える

「ここにあつたんだ・・・」

目から、あつい液体が流れる

「2人のなんだから・勝手に持つてくなよおお・・・！」

耐えきれなくなつて、声をころして泣いてしまつた

「星のかーべい3」

スーパーファミコン屈指の名作ゲームであり、クレヨンで描いたような絵のタッチやカービイの仲間たちと力を合わせた多くのアクション要素が特徴で、今も熱狂的なファンが多い。私もステージやボ

スキヤラの攻略方法、どこのステージでどのBGMが流れるかさえ今も覚えているほど大好きなゲームだ。今でも楽しく遊ぶことができ  
る、いや、もしかしたら子供の頃より視野が広くなつた分昔より樂し  
いかも知れないと確信している。だが、私はこのゲームをもうプレイ  
することはないだろう。

なぜなら、このゲームで遊んでいるとき、ふと横を見て、そこにい  
るはずの人気がいなくて、不自然に空いてしまつた空間を見た時、きつ  
と、

私は  
僕は

このゲームが大嫌いになつてしまつから